

平成三十年十月

河村郁子

生命に係るほどの猛暑すぎ残^{のこ}んの熱に秋暮れなづむ

境内の公孫樹のみどり極まりて根方にぎんなん三つ四つ五つ

菩提樹の木下に羅漢思惟^{しゆい}像 実の落ちくるを如何にかもせむ

「いはし雲出たら鱚」と送りくれる銚子の港に一会^{いちゑ}の漁師

日本橋べつたら市に着はじめし羅紗のオーバー 夜寒かりき

浄土とも焦土なりとも染めつくす秋夕焼のさうごんに向く

山腹にきらめく 橙の縁取りの雲を侍らす今日の夕富士

ヒマラヤの岩塩の塊くり貫きしランプの灯りに寂^さぶる秋の夜

平成の最後と眺むる十三夜清みわたる空に孤高の光

しぐれ月尽の朝^{あした}に庭ぬちの千両の実が色付きそむる